

## 外国史・世界史授業の新しい視点への試み（1）

青 柳 かおり\* 甘 利 弘 樹\*\*

（平成29年12月19日受理）

【要 旨】 本論文は，中学校社会科歴史分野及び高等学校地理歴史科世界史の教員免許取得に対応した授業について，新しい視点を提案するものである。（1）では，学習指導要領の検討を行う。

### I 問題と目的

本論文は，最新の中学校学習指導要領・社会及び改訂予定の高等学校学習指導要領・地理歴史を視野に入れ，大学における外国史（世界史）授業の新しい視点を提案するものである。

平成28年度以降，中学校社会科歴史分野では，改訂された学習指導要領に基づいて新しいカリキュラム・教科書が用いられている。一方で高等学校地理歴史科では，平成32年度から改訂された学習指導要領が実行に移される予定になっており，平成29年度において，当該の新しい学習指導要領の骨子が示された<sup>1)</sup>。これらの動きと併せて気をつけたいのが，小学校社会科，中学校社会科，高等学校地理歴史科・公民科において，一貫した「社会の見方・考え方」という観点が設けられた<sup>2)</sup>ことである。このことに中高一貫教育の趨勢も含めて，中学校社会科歴史分野及び高等学校地理歴史科世界史の授業は，新しい視点や方法を見出す必要がある。

本論文では，上記の近年の動向を承けて，中学校社会科歴史分野の外国史に該当する内容と高等学校地理歴史科世界史の内容との結びつきを意識しつつ，題材として移民をはじめとするヒトの移動・モノの移動を主に取り上げた新しい授業の視点を提示・解説するものである<sup>3)</sup>。

### II 方法

#### 1. 授業の前提 ―シラバス・学習指導要領―

最初に，中学校社会科における外国史及び高等学校地理歴史科世界史の学習・教員免許取得に関わる授業である「世界史概説」のシラバスを示すことにしたい。また併せて，中学校学習指導要領社会科歴史分野の構成（項目）を提示する。

---

\* あおやぎ かおり 大分大学教育学部社会科教育教室（西洋史）

\*\* あまり ひろき 大分大学教育学部社会科教育教室（東洋史）

○世界史概説のシラバス

【授業科目】

世界史概説

【授業のねらい】

中学校社会科の範囲における世界の歴史について考察します。2008年に告示された最新の「中学校学習指導要領」では、我が国の歴史の背景となる世界の歴史の扱いの充実が求められています。さらに我が国の歴史の展開を、世界の歴史と一層関連づけて学習するようになってきていることから、授業方法も従来と異なる多様なものが必要となっています。

本授業では、より有効な歴史の授業を行うために、我が国の歴史に深く関わった世界の動きを整理・分析し、併せて斬新かつ効果的とされる授業方法について考えていきます。

【具体的な到達目標】

本授業は、中学校社会科免許取得の必修科目であることから、「中学校学習指導要領」に基づき、かつ社会科（歴史分野）を教授していくために必要な知識を身に付け、実践してもらいます。そして中学校社会科の範囲における国家・地域や時代を学びながら、特に諸外国の歴史について理解し、知識を持つことによって、社会科教員としての資質能力を高めることが大きな目的です。

【授業の内容】

- 第1回：オリエンテーション
  - 第2回：世界の古代文明
  - 第3回：古代の日本と東アジア世界
  - 第4回：中世の日本と東アジア世界
  - 第5回：日本へのヨーロッパ人来航とその背景
  - 第6回：近世初期における日本の対外関係
  - 第7回：ヨーロッパにおける近代社会の形成
  - 第8回：アメリカの台頭
  - 第9回：欧米諸国のアジア進出
  - 第10回：世界史上の日清・日露戦争
  - 第11回：近代の日本と中国・朝鮮
  - 第12回：第一次世界大戦期の世界
  - 第13回：戦間期のヨーロッパ・アメリカ・アジア
  - 第14回：第二次世界大戦の惨禍
  - 第15回：戦後の国際関係
- 定期試験

【時間外学習】

図書館の本・インターネットの情報などを収集し、世界の歴史についてはもとより、現代の国際情勢について、常に理解を深めてください。

**【教科書】**

特になし。プリント資料・VTR資料を使用します。

**【参考書】**

『中学校学習指導要領解説 社会編』。その他は、授業中に提示します。

**【成績評価方法及び評価の割合】**

総合評価。授業時のライティング35%，授業時のルール・マナー遵守状況35%，期末試験30%。ただし以上3項目のうち1つが不合格の場合、全体として成績が不合格となります。

**【注意事項】**

オリエンテーションの際に注意事項を説明します。

**【備考】**

なし。

○中学校学習指導要領・社会科歴史分野の構成

A 歴史との対話

B 近世までの日本とアジア

(1) 古代までの日本

- (ア) 世界の古代文明や宗教のおこり
- (イ) 日本列島における国家形成
- (ウ) 律令国家の形成
- (エ) 古代の文化と東アジアとの関わり

(2) 中世の日本

- (ア) 武家政治の成立とユーラシアの交流
- (イ) 武家政治の展開と東アジアの動き
- (ウ) 民衆の成長と新たな文化の形成

(3) 近世の日本

- (ア) 世界の動きと統一事業
- (イ) 江戸幕府の成立と対外関係
- (ウ) 産業の発達と町人文化
- (エ) 幕府の政治の展開

C 近現代の日本と世界

(1) 近代の日本と世界

- (ア) 欧米における近代社会の成立とアジア諸国の動き
- (イ) 明治維新と近代国家の形成
- (ウ) 議会政治の始まりと国際社会との関わり
- (エ) 近代産業の発展と近代文化の形成
- (オ) 第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現

- (カ) 第二次世界大戦と人類への惨禍
- (2) 現代の日本と世界
  - (ア) 日本の民主化と冷戦下の国際社会
  - (イ) 日本の経済の発展とグローバル化する世界

次章では、上記中の中項目の各内容を、『中学校学習指導要領解説・社会編』（文部科学省2017年6月。以下「解説」と略記）に基づいて分析し、各内容に関する新たな視点を提示していくこととしたい。

## 2. 「古代までの日本」について

(ア) 世界の古代文明や宗教のおこり

(内容)

世界の古代文明や宗教のおこりを基に、世界の各地で文明が築かれたことを理解すること。

(内容の取扱い)

ア (1)のアの(ア)の「世界の古代文明」については、人類の出現にも触れ、中国の文明をはじめとして諸文明の特徴を取り扱い、生活技術の発達、文字の使用、国家のおこりと発展などの共通する特徴に気付かせるようにすること。また、ギリシャ・ローマの文明について、政治制度など民主政治の来歴の観点から取り扱うこと。「宗教のおこり」については、仏教、キリスト教、イスラム教などを取り上げ、古代の文明とともに大きく捉えさせるようにすること。

<ねらい>

世界各地で文明が築かれたことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>4)</sup>。

古代文明のうち、中国の文明を筆頭に置いた理由が、その後の授業展開として、中国の文明が日本と東アジアの関係を取り上げる前提として必要となるためであることは、「解説」にも関連する記述があり、ほぼ間違いない。そして中国の文明、特に黄河文明が、エジプト文明・メソポタミア文明・インダス文明と同様に、大河のほとりに形成されたことを、生徒に気付かせるのは、従前の授業における定番となっている。

その一方で、ギリシャ・ローマの文明が、必ずしも大河流域に形成されたわけではないことを考えると、文明が大河流域にできるものというステレオタイプを切り崩し、新たな文明の発生理由を考える必要がある。このときのキーワードが、文明発生諸地域の周辺との交流と衝突である。すなわち、各文明の担い手は、その周辺地域の諸集団との交流や戦争などによって、文明を高度化させていったことを見出せるようにしたい。そしてこの周辺との交流・衝突を経て形成された人間・社会の意識が、国家形成の原点にもなっていくのであり、文明発生の必要条件が把握できるのである。ことに中国では、いわゆる中華帝国の担い手とその周辺諸民族との、言い換えれば農耕民と遊牧民との交流・対立によって、その歴史をわかりやすく把握できるのである。

一方で、「宗教のおこり」について、仏教、キリスト教、イスラム教を文明とともに取り上げることは、世界史を考える上で異論はない。ただし、上記三宗教が、文明を肯定的に反映したものではなく、いわば異端として発生し、多かれ少なかれ迫害・弾圧を経た後、多くの信者を得て文明の代表となったことに気をつけさせたい。しかも、キリスト教はローマ文明と、仏教はインダス文明とリンクできるが、イスラム教は、直接古代文明に結びつかないことに注意を払う必要がある。その対応策としては、イスラム教がキリスト教と同様にイェルサレムを聖地としたことから考えることがあり得るだろう。また、イスラム教を学ぶ際には、やや踏み込んだ内容であるが、イスラム教成立の背景に、商人の広範な活動があったこと、商業について寛容である<sup>5)</sup>ことを特に強調しておくべきことである。

なお、「内容の取扱い」では、「人類の出現にも触れ」と言及されている。このことはアウストラロピテクスがアフリカ大陸から世界各地に移動したこと学ばせるように指し示している。ここでも学習のキーワードとして、ヒト・モノの移動を挙げることができる<sup>6)</sup>。

#### (イ) 日本列島における国家形成

##### (内容)

日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和朝廷(大和政権)による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解すること。

##### (内容の取扱い) ※外国史に特に関わる内容

(前略) 大和朝廷(大和政権)による統一の様子と東アジアとの関わり」については、古墳の広まりにも触れるとともに、大陸から移住してきた人々の我が国の社会や文化に果たした役割にも気付かせるようにすること。

<ねらい>

東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>7)</sup>。

ここでは、日本の縄文時代～古墳時代を理解するために、東アジアとの関わりを視点として導入する方向性が見出せる。教科書では、奴国の王が受け取った金印(漢委奴国王の印)や、魏から邪馬台国の卑弥呼に送られた金印が取り上げられているが、これらの金印を得ようとした理由が明記されていない。しかしこれは奴国の場合も、邪馬台国の場合も、周辺勢力との抗争の中で大陸の強国の権威を得ようとしたことが説明されれば、理解度が深まるだろう。

また、大陸から移住してきた人々、つまり渡来人に関して、日本が中国・朝鮮の人々の技術や文化を得ようとしていたことはわかりやすいが、なぜ中国や朝鮮から人々が日本に渡ろうとしたのかが不明確である。この渡来人のプッシュ要因が不明な点は、中国で農耕民と遊牧民との間で対立・抗争が続いていたこと(具体的には、魏・晋と北方民族との融和と対立、南北朝の成立)、その社会混乱の中で、いわば生きるため、あるいは技術や知識を生かすために、日本へ渡ったと説明できるようにしたい。

(ウ) 律令国家の形成

(内容)

律令国家の確立に至るまでの過程，摂関政治などを基に，東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族による政治が展開したことを理解すること。

(内容の取扱い)

(1)のアの(ウ)の「律令国家の確立に至るまでの過程」については，聖徳太子の政治，大化の改新から律令国家の確立に至るまでの過程を，小学校での学習内容を活用して大きく捉えさせるようにすること。なお，「聖徳太子の政治」を取り上げる際には，聖徳太子が古事記や日本書紀においては「厩戸皇子」などと表記され，後に「聖徳太子」と称されるようになったことに触れること。

<ねらい>

東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族による政治が展開したことを，次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>8)</sup>。

ここでは，国家の仕組みを整える際に，東アジアの文物や制度が取り入れられたことを学ぶことが記載されている。具体的なアプローチとしては，文物については正倉院宝物が，制度については律令制度がテーマとなることが想定される。ただし，既習事項を生かすために，正倉院宝物になぜペルシャのガラス器等があるのか（答えはムスリム商人の活躍，長安の発展，遣唐使の派遣等），律令制度を導入するために行われた遣唐使は，なぜ停止されたのか（これは諸説あるが，解答の一例として，当時の中国(唐)の広範囲において，移動者の活動（遊牧民の侵入や流賊）による混乱が生じていたことが挙げられる）といった問いかけや課題が求められるだろう。

(エ) 古代の文化と東アジアとの関わり

(内容)

仏教の伝来とその影響，仮名文字の成立などを基に，国際的な要素をもった文化が栄え，それらを基礎としながら文化の国風化が進んだことを理解すること。

(内容の取扱い)

なし

<ねらい>

国際的な要素をもった文化が栄え，それらを基礎としながら文化の国風化が進んだことを，次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>9)</sup>。

ここでは，奈良時代から平安後期までにおける文化の変容を，国際化から国風化への移行として捉えるように示されている。この文化の変容の大きなきっかけは，遣唐使の停止であるが，日本と中国・朝鮮半島との商業活動は民間で行われていたこと，その商業活動による利益に平清盛が目をつけ，日中間の貿易（日宋貿易）を開始し，宋銭が日本に入ったことに話題をつなげたい。

## 2. 「中世の日本」について

### (ア) 武家政治の成立とユーラシアの交流

#### (内容)

鎌倉幕府の成立，元寇（モンゴル帝国の襲来）などを基に，武士が台頭して主従の結び付きや武力を背景とした武家政権が成立し，その支配が広まったこと，元寇がユーラシアの変化の中で起こったことを理解すること。

#### (内容の取扱い)

イ (2)のアの(ア)の「ユーラシアの変化」については，モンゴル帝国の拡大によるユーラシアの結び付きについて気付かせること。

#### <ねらい>

武家政治の特徴を考察して，武士が台頭して武家政権が成立し，その支配が広まったこととともに，元寇（モンゴル帝国の襲来）がユーラシアの変化の中で起こったことを，次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>10)</sup>。

ここでは，元寇ことモンゴルの襲来に着目するが，教科書はどうしても鎌倉文化を学んだ後に突然モンゴル帝国について扱うことになってしまう。これに対しては，鎌倉文化が中国（宋）の影響を受けていたこと（東大寺の建築様式，宋の渡来僧），宋もモンゴル帝国もイスラム商人を受け入れていたことを指摘した上で，モンゴル帝国が商業を基盤として発展するとともに，強大化したことを明らかにする展開を生み出したい。

なお，元寇については，「解説」に次のようにある。

元寇（モンゴル帝国の襲来）については，元寇が国内に及ぼした影響などに気付かせるとともに，元寇の背景について，「モンゴル帝国の拡大によるユーラシアの結び付き」（内容の取扱い）などの地理的な確認を基に，元（中国を中心としたモンゴル帝国東部）の君主が帝国全体の君主でもあったことなどを踏まえ，モンゴル帝国がアジアからヨーロッパにまたがる広大な領域を支配し，東西の貿易や文化の交流が陸路や海路を通して行われたことなどに気付くことができるようにする。

このことから，地図によるモンゴル帝国の位置の確認と，砂漠などの乾燥地帯・遊牧地帯を包括して大帝國を形成させた事実（そのため商業に対して積極的だった）の確認が求められるだろう。なお，「元（中国を中心としたモンゴル帝国東部）の君主が帝国全体の君主でもあったこと」は，元滅亡の一因が継承者争いだったこととして言及すべきだと考える。

### (イ) 武家政治の展開と東アジアの動き

#### (内容)

南北朝の争乱と室町幕府，日明貿易，琉球の国際的な役割などを基に，武家政治の展開とともに，東アジア世界との密接な関わりが見られたことを理解すること。

#### (内容の取扱い)

(2)のアの(イ)の「琉球の国際的な役割」については，琉球の文化についても触れること。この事項のねらいは，武家政治の展開とともに，この時代に東アジア世界との密接な関わりが見られたことを，次のような学習を基に理解できるようにすることである。

<ねらい>

武家政治の展開とともに、この時代に東アジア世界との密接な関わりが見られたことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>11)</sup>。

ここについて、「解説」では、

「東アジアにおける交流」などに着目して、東アジアの動きが国内の政治や社会に与えた影響を考察できるようにしたりすることなどが考えられる。これらの考察の結果を表現する活動などを工夫して、「武家政治の展開とともに、東アジア世界との密接な関わりが見られたことを理解できるようにする」という、この事項のねらいを実現することが大切である。

とある。上記の「東アジアの動き」とは、明が成立して元が北方に後退したこと、朝鮮半島では高麗に代わって朝鮮が成立したことを指す。さらに言えば、こうした動きに密接に関わるのが倭寇である。倭寇については膨大な研究があるが、授業で取り扱う場合には、明が国内的・国際的な秩序を形成するために、日本に対して倭寇の取り締まりを要請するようになったこと、朝鮮成立の背景には倭寇の侵入による朝鮮半島の混乱があったことを認識させるべきであろう。

こうした14世紀における王朝の成立の背景には、「14世紀の危機」が挙げられる。この危機は、地球全体の寒冷化によるもので、アジア・ヨーロッパにおける農作物の不作・人々の動揺・反乱の発生をもたらした。特にヨーロッパでは、14世紀に百年戦争の勃発、ペストの流行、農民反乱の発生を経て、農民ら民衆の地位向上が始まり、ルネサンス以降の文化の担い手の発生を促進した事実を見出したい。

また、日明貿易は「解説」において以下のように記述されている。

日明貿易については、その形式や内容の特徴に触れるとともに、銅銭が大量にもたらされ、貨幣経済の発達を促したことなど、国内の経済や社会に及ぼした影響に気付くことができるようにする。

ここから、倭寇の取り締まりという視点から、冊封と朝貢という対外秩序を形成させた明と、明との貿易を開始できた室町幕府とのWin-Winの関係を見出すべきである。一方で、銅銭が日本の広範囲において流通したことを述べる際には、「十三湊や函館などアイヌ（後出）との交易でも使用されたことにも留意すべきである。

さらに琉球については、「解説」に次の通り記述されている。

琉球の国際的な役割については、琉球が日本、明や朝鮮、更には東南アジア諸国との中継貿易に従事したことに気付くことができるようにする。また、「琉球の文化」（内容の取扱い）については、アジアとの交流の中で育まれた琉球の独自の文化について触れるようにする。

このことから、琉球が貿易国家として発展したことを、主に交易品の特徴からアプローチすることが有効であると考えられる。すなわち、琉球の対外貿易では、琉球の現地産の品物が少なかったこと、日本や東南アジアの商品を明にもたらしていたことを明らかにすることで、琉球の国際的な役割が明確になるのである。

一方で最新の学習指導要領において新たに組み込まれた内容として、琉球の文化について触れることが明記されている。現行の教科書（東京書籍）では、琉球の文化を表すものに、紅型の衣服、首里城、おもろがあるほか、「深めよう」の項目の中で、2ページを琉球王国の内容としている<sup>12)</sup>。ただし言うまでもなく、琉球の文化は以上のモノ・コトに止まらない。音楽・



舞踊・学問の諸分野を通して、アプローチする手法もあり得るだろう。

(ウ) 民衆の成長と新たな文化の形成<sup>13)</sup>

外国史に直接該当する内容はないため、(内容)・(内容の取扱い)・〈ねらい〉の記載とその検討は省略する。ただし当然ながら、本項目の内容は、前項までの東アジアとの交流による中国銭の流入・流通とそれに伴う貨幣経済の活発化を背景としている。

### 3. 「近世の日本」について

(ア) 世界の動きと統一事業

(内容)

ヨーロッパ人来航の背景とその影響、織田豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを基に、近世社会の基礎がつくられたことを理解すること。

(内容の取扱い)

ウ (3)のアの(ア)の「ヨーロッパ人来航の背景」については、新航路の開拓を中心に取扱い、その背景となるアジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結び付きに気付かせること。また、宗教改革についても触れること。「織田・豊臣による統一事業」については、検地・刀狩などの政策を取り扱うようにすること。

〈ねらい〉

日本の近世社会の基礎がつくられたことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>14)</sup>。

ここでは、日本へのヨーロッパ人来航の背景を追って行くが、その背景をどこまで追うかは複数のパターンがあると思われる。すなわち、

- ①イタリアと元の間を往復した商人マルコ・ポーロの発言に基づく『東方見聞録』に「黄金の国ジパング」という記載があった。その記載をもとに、ヨーロッパ人の中に、ジパングへ渡ろうとした動きが出てきた。これが新航路の開拓につながる。
- ②「1543年に、ポルトガル人が種子島に漂着した。このとき、ポルトガル人が日本人に鉄砲の技術を伝えたと言うが、言葉が通じないのに、どうして技術が伝えられたのだろうか？」という発問から、漂着したポルトガル人の同行者だった中国人が通訳をしていたことを説き明かす<sup>15)</sup>。
- ③琉球は、明・朝鮮・日本・東南アジアとの貿易によって繁栄していたが、巨大で速度の速いオランダ船などに競争で敗れた。その背景を追究する。

以上①～③のうち、①は日明貿易や室町文化の話題から遡る形になるが、日本が遣唐使船・民間船などを通じて金を中国に送っていたことを思い出させるとともに、マルコ・ポーロという具体的な人物を題材にすることから、ヨーロッパ人の日本来航の疑問にアプローチが可能である。ただし、マルコ・ポーロは近年その存在が疑問視されていることに注意したい。

②は、偶然起こったポルトガル人の種子島漂着という事柄から、コミュニケーションの取り方を生徒に考えさせ、当時の東アジア海域でマルチリungalの中国人という存在に気付かせる

ことから、ヨーロッパと日本とをつなぐとともに、ヨーロッパ人の来航を遡及して考えさせるものである。ただし中学校社会科の教科書では、マルチリンガルの中国人（中国人倭寇）は登場しないため、教員の説明が必要になる。

③は、琉球の衰退を学ぶことになり、後の学習で薩摩藩が琉球王国を侵略することに絡められることが有効である。ただし琉球に注目させるのは、生徒に突然のことに感じ取られる懸念があるため、「中世の日本」の既習事項を復習させることが大切だろう。

総じて①～③は、生徒の授業理解度に基づき個別に取り上げるか、①～③を適宜組み合わせで取り扱うことが妥当であると思われる。

以上のように、日本・琉球をはじめとする東アジアにヨーロッパ人が渡航した事実をもとにその渡航の理由を考える際には、教科書でしばしば提示されるように、ローマ帝国の分裂、十字軍の開始を経た後の西ヨーロッパ社会の変化、すなわち教皇権の動揺と新教（プロテスタント）の登場及び王権の伸張、ギリシャ・ローマ文化の自由な気風の伝達によるルネサンスの勃興とそれに基づく羅針盤・火薬・活版印刷といういわゆる三大発明があることを学ばせる必要がある。

その上で、スペイン・ポルトガルがムスリム商人を介さずに南米大陸の銀を東アジアにもたらしたこと、ヨーロッパ人が香辛料のある東南アジアを目指したこと、そして宗教改革に対する動きとしてイエズス会宣教師が世界的な布教を進めたことを明らかにし、ヨーロッパ人の日本来航の解答としたい。

なお、「解説」には

また、当時の対外関係として、東南アジアなどとの積極的な貿易、キリスト教への対応、朝鮮への出兵などを取り上げる。

という一文がある。これらは、後の江戸幕府の対外政策（貿易利益を独占するための幕府の海外貿易統制、キリスト教の弾圧、朝鮮出兵による豊臣政権没落から学んだ海外進出の抑制）につながることも意識しておきたい。

#### (イ) 江戸幕府の成立と対外関係

(内容)

江戸幕府の成立と大名統制、身分制と農村の様子、鎖国などの幕府の対外政策と対外関係などを基に、幕府と藩による支配が確立したことを理解すること。

(内容の取扱い)

(3)のアの(イ)の「鎖国などの幕府の対外政策と対外関係」については、オランダ、中国との交易のほか、朝鮮との交流や琉球の役割、北方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。その際、アイヌの文化についても触れること。「幕府と藩による支配」については、その支配の下に大きな戦乱のない時期を迎えたことなどに気付かせること。

<ねらい>

幕府と藩による支配が確立したことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>16)</sup>。

ここでは、いわゆる「四つの口」（長崎、薩摩、対馬、蝦夷地）を介した海外とのつながりと幕府による外交の統制を述べる。特にアイヌの学習を強調しているが、領土の学習の前段階

としての重要性を把握させる意味があること、及び人権の立場から言及されていることに注意したいところである。

(ウ) 産業の発達と町人文化<sup>17)</sup>

外国史に直接該当する内容はないため、(内容)・(内容の取扱い)・〈ねらい〉の記載とその検討は省略する。

(エ) 幕府の政治の展開

(内容)

社会の変動や欧米諸国の接近、幕府の政治改革、新しい学問・思想の動きなどを基に、幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解すること。

(内容の取扱い)

(3)のアの(エ)の「幕府の政治改革」については、百姓一揆などに結び付く農村の変化や商業の発達などへの対応という観点から、代表的な事例を取り上げるようにすること。

〈ねらい〉

幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを、次のような学習を基に理解できるようにすることである<sup>18)</sup>。

ここについて、「解説」では、

社会の変動や欧米諸国の接近については、貨幣経済の農村への広がりや自然災害などによる都市や農村の変化などを踏まえ、近世社会の基礎が動揺していったことに気付くことができるようにするとともに、江戸時代後半の外国船の接近や、それに対応した幕府による北方の調査や打払令などを扱うようにする。欧米諸国の接近の事情については、内容のCの「(1) 近代の日本と世界」のアの(ア)で扱う。

と記述されている。江戸時代後半の外国船の接近や、それに対応した「幕府による北方の調査や打払令などを扱う」とする一方で、外国船の日本へ接近した理由・背景についての学習を、後の授業に託していることがわかる。これは、外国船の来航の背景を、紙幅を確保しつつ市民革命・産業革命をふまえて十分説明するためであると考えられる。

(以上学習指導要領の前半まで考察してきた。その後半については次稿に譲る)

## 注・参考文献

- 1) 文部科学省「社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて(報告)」2016年  
URL : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/071/sonota/1377052.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/071/sonota/1377052.html)。
- 2) 同前注、及び『小学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省 2017年6月)、『中学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省 2017年6月)。
- 3) このような学習指導要領を検討した先行事例として、高津純也「新学習指導要領に対応する地歴科教育の試み ―高等学校『世界史B』を題材に―」(『川村学園女子大学研究紀要』25-1, 2014年)等がある。

- 4) 「解説」 89-91頁。
- 5) 「コーランか、貢納か、剣か」あるいは「コーランか、剣か」というイスラム教徒の行動様式に関する表現は、近年否定的見解が示されている。
- 6) 最近ではサヘラントプス・チャデンシスが最古の人類となっているが、これもアフリカ起源である。
- 7) 「解説」 91-92頁。
- 8) 「解説」 92-93頁。
- 9) 「解説」 93-94頁。
- 10) 「解説」 95-96頁。
- 11) 「解説」 96-97頁。
- 12) 『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍，2017年発行）81頁，92-93頁。
- 13) 「解説」 97-98頁。
- 14) 「解説」 99-100頁。
- 15) これに関する高次の授業実践例（中学校）として，日高智彦「鉄砲を伝えたのは誰か」鳥山孟郎・松本通孝編『歴史的思考力を伸ばす授業づくり』（青木書店，2012年）がある。
- 16) 「解説」 100-101頁。
- 17) 「解説」 101-102頁。
- 18) 「解説」 102-103頁。

## A Trial of New Views on the Class of Foreign History and World History (Part I)

Kaori AOYAGI, Hiroki AMARI

### Abstract

The purpose of this study is to suggest new views on the class of foreign history and world history in university education that aimed at the teaching certificate acquisition of social studies in junior high school teachers training course and “Geography and History” in high school teachers training course. Part I is what examine the National Curriculum Standards.

Key Words : foreign history, world history, the National Curriculum Standards